

2019年度

SC

小論文

3月12日(火) 人文社会科学部 (法学科)
【後期日程】

10:00～11:30

注意事項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(2枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は、4ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙(1枚)を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 問題は、声を出して読んではいけません。
- 6 配点は、比率(%)で表示してあります。

試験終了後

- 7 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

視覚障害者のものの見方について書かれた次の問題文を読み、設問に答えなさい。なお、問題文を記載にするにあたっては、原文を一部改めた。

[問題文]

見えない人には、特別な聴覚や触覚が備わっている。音だけで状況を理解する不思議な耳。微妙な質感の違いを触り分ける特別な手。彼らの感覚は、見える人のそれとは全く別のものなのだ——。「見えない人の感覚」と聞いて、そんなイメージを持つ人は多いのではないのでしょうか。

ここではまず、この見える人が抱きがちなイメージを疑うところから始めたいと思います。見えない人は、本当に「特別な聴覚や触覚を持っている人」なののでしょうか。

確かに彼らは、ある意味ではすぐれた聴覚や触覚の持ち主です。先天的(厳密には、小さいときは見えていたが、その記憶を持っていない)全盲の白鳥建二さんは、聴覚を存分に働かせ、お湯が沸く音やドアが閉まる音、声の反響具合によって、自分が今いる場所についての情報を把握しています。ポットのある方向、部屋の広さ、家具の位置、窓が開いているかどうか、カーテンが閉まっているか等々、ちょっとした音を手がかりに部屋のイメージを頭の中に作り上げます。

(中略)

また、ベン・アンダーウッドという黒人の全盲の少年は、常に舌打ちをしつづけ、その反響音で空間を把握することで知られていました。「反響定位」と呼ばれるこうした認識法は、通常はイルカやコウモリの能力とされていますが、彼はこの方法を駆使してスケボーやバスケットを楽しんでいたのです。

あるいは、広瀬浩二郎さんは、自分の研究室にある壁一面の本の中から、背表紙の感触で目当てのタイトルを探し出すことができます。週に一度サポートに来るスタッフがなかなか見つけられなかった本を、広瀬さんは目を使わずに探し出した。わあ、すごい！見えない人の触覚はさすがに違うね！そんな話になるのも無理のないことかもしれません。

そう、確かに見えない人は、聴覚や触覚といった視覚以外の感覚を積極的に用いています。見える人が使っていないような仕方でも、それを使っているのも事実。したがって、まずはその違いを認識しておくことは大事です。

でも、違いを認めることと、特別視することは違います。「視覚障害者はすごい！」と誉めているんだから、特別視するのはいいことじゃないか、と思われるかもしれません。ところが、こうした態度は二つの点で問題をはらんでいます。以下にあげる二つの問題は、私が考えたことではなくて、見えない人から直接聞いた、つまり彼らが実際に感じている違和感です。

まずひとつめの問題は、「すごい！」という驚嘆の背後には、見えない人を劣った存在とみなす蔑みの目線があることです。「すごい」は単なる「すごい」ではなくて、実は「見えないのにすごい」ということなのです。

もちろん、「すごい！」と言った人は、蔑むような意図などまるっきりなしにそう言ったはずですが、でも、無意識のレベルで「見えない人は見える人にできることができないはずだ」と考えていることを、見えない人は感じとっています。

本棚から本を探し当てることは、見えている人にとっては「当たり前」の行為です。しかし、見えない人にとっても、それは同じように「当たり前」のことなのです。自分にとって当たり前のことを「すごい」と言われたら、誰だって「おいおい、ナメないでおくれよ」となるでしょう。

(中略)

特別視がもたらす問題の二つめは、見えない人のイメージを固定してしまうことです。道を歩くことひとつとっても、聞こえてくる音⁽¹⁾をたよりにする人、杖と足の裏の感触から情報を得る人、頬にあたる風を手がかりにして曲がるべき角やエレベーターホールの位置を把握する人など、その手法はさまざまです。

同じ触覚を利用する人でも、きわめて慎重に進む「石橋を叩いて渡る」タイプの人もいれば、とりあえず足や白杖を出してみ、ぶつかって壁や柱を把握する「出たところ勝負」タイプの人もあります。駅などで壁に向かって行く人を見ると「危ないですよ」と声を掛けたくりますが、彼らはぶつかることで、対象を知覚しているわけです。

そう、私たちはつい「見えない人」とひとくくりにしてしまいがちですが、実はその生き方、感覚の使い方は多様なのです。「見えない人は聴覚や触覚がすぐれている」という特別視は、この多様性を覆い隠してしまうことになりかねません。

木下さんは「ぼくはポットの位置なんか分からないよ」と笑いながら言いますし、そもそも感覚なんか研ぎすまさずに「どんどん人に聞く」というのも一つの認識の方法です。こうした多様性を無視して、「見えないということは触覚がすぐれているんですね」という態度で最初から接したら、「すごい」と称賛したつもりが逆に相手にプレッシャーを与えてしまいかねません。

もともと、かつては「イタコ」(注1)や「座頭市」(注2)のように、こうした特別視が、社会における視覚障害者の地位を作り出してもいました。特別視が見えない人の社会的地位を保障していたことを考えると、それは一概に否定すべきものではないのかもしれない。

とはいえ、特別視による神聖化は、遠ざけることにつながります。「変身」をモットー(注3)とする本書では、見えない人を、むしろ「友達」や「近所の住人」のように身近に感じる方法をさぐります。そうすることで、社会の共同運営者としてつきあうような関係を作り出したいと願っています。

「見えない人の特別でなさ」について、ひとつ例をあげましょう。彼らの触覚についてです。「見えない人は点字に触れるんだから、何でも触れば分かるんだろう、すごいな」——。私も見えない人と関わるまでは、そんなふうに思っていました。見えない人といえば点字、点字といえば触覚。見える人はつついそんな方程式をイメージしがちです。点字は駅の案内板などいろいろな場所で目にする機会が多いので、そういうイメージが助長されるのでしょう。

しかし実際は、見えないからといってみんながみんな点字が読めるわけではないし、仮に点字が分かったとしても、それがただちに触覚の鋭さにつながるわけではありません。つまり、「見えない人＝点字」と「点字＝触覚」という二つの方程式は、二つともかなりあやしい、信用できない方程式なのです。

まず「見えない人＝点字」の方程式について。少し古いデータですが、2006年に厚生労働省が行っ

た調査によれば、日本の視覚障害者の点字識字率は、12.6パーセント。つまり、見えない人の中で点字が読める人はわずか1割程度しかいないのです。

この低識字率の理由は、ひとつには点字を習得することの難しさがあげられます。英語を小さいうちに学んでおくとLとRの発音が上手にできるようになるよ、なんて言いますが、同じように、点字も小学校高学年くらいまでに習わないと、なかなか速く読めるレベルに達することができないと言われていています。成人してから事故や病気で視力を失った人にとって、これはかなりのハードルです。

また、読めたとしても自分で点字を打つとなるとさらにハードルが上がります。点字は、手で打つときと読むときでは、紙を裏返します。するとパターンが左右反転してしまう。他の言語にはないこの特性も、点字習得を難しくしている原因のひとつでしょう。もちろん点字には点字ならではの文化があり、難しいからといって劣った言語である、ということにはなりません。しかし現実問題として、使いこなせるようになるにはそうとうの努力が必要とされるようです。

もうひとつの理由は、電子化とインターネットの発達によって、点字を身につける必要性が減少していることです。電子化されたテキストなら、音声読み上げソフトによって耳で聞くことができます。「サビエ」というインターネット図書館を利用すれば、月刊誌や週刊誌もほぼ時差なく読むことができますし、データをボイスレコーダーにダウンロードして持ち歩けば、通勤通学の途中でも読書することが可能。全国のボランティアの尽力のたまものです。こうなると、点字ができる人であっても、「日々の生活で使うのは整理整頓用のラベルくらい」というのが実際のところなのかもしれません。

さらに深刻なことに、こうした電子化の影響は、若い世代ほど強く受けています。見える世界でも若者の「活字離れ」が叫ばれて久しいですが、見えない世界でも同じように「点字離れ」が進んでいます。若い世代は電子化の波をダイレクトに受けていて、パソコンや携帯を駆使して見える人と同じように情報を収集します。スマートフォンを使いこなす視覚障害者も増えています。タッチパネルも、もちろん使いこなします。

さらに、もう一つの方程式、「点字=触覚」の方も、実は信用できるものではありません。「点字離れ」は想像できて、こちらの方はかなり意外な印象を与えるかもしれません。

たとえば、点字が読める人に二枚のタオルを渡し、その質感の違いを感じられるかと聞いてみると……答えは必ずしもイエスとはなりません。要するに、点字を理解する能力と、タオルを触り分ける能力は、全く別物なのです。詳しくはあとでお話ししますが、点字を理解する能力は、触る能力というより読む能力、つまり見える人が目でやっている仕事に近いのです。

このようなことを知らずに、「見えない人=点字=触覚」の方程式で状況を解こうとしてしまうと、「見えない人にとって、必要な情報は何でも触れるようにしてあげるの^{しくしじょう}がいい」と杓子定規に考えがちです。たとえば、図形や絵の情報を伝えるために、それを立体コピーして見えない人に渡したとします。立体コピーとは線の部分が浮き出るように加工する印刷技法で、エンボスとも言われます。立体化された図形などを触って観察することを「触察」と言い、教育現場にも導入されるなど有用な場面もたくさんありますが、細かい図になってくると、見えない人であっても、理解するのは容易ではありません。線が混ざって模様のようになってしまいます。

けれどもこうしたケースでは、「分からない」とはなかなか言いだしにくいものです。「わざわざ立体コピーをしてくれたのに悪い」と感じてしまう人もいるでしょう。それではますますディスコミュニケーション⁽²⁾が深まってしまいます。

それに、根本的な問題ですが、見えない人にとって、触ること自体が楽しいわけではありません。おそらくそこには、触覚を快感と結びつける、見える人の側の価値観があります。確かに、毛皮に触れたり、逆に肌を撫でられることは、親密さやエロティックな感情を喚起しうるものです。でも、見えない人が行う「触察」は、撫でることとは違います。物に触ることと、立体化された情報に触ることは違うからです。触ることによって得られた内容が楽しいのであって、触る行為が楽しいわけではありません。見える人にとって見る行為が楽しいわけではないのと同じです。

さらに見えない人の中には、公共の場では触覚がネガティブな印象を与えることを気にしている人もいます。確かに、お店などで子どもが商品にベタベタと触りまくったら、注意されることが多いでしょう。このように、見える人の価値観を知っているから、「いかに触らないで把握するか」に配慮している視覚障害者もいるわけです。そのような人に向かって「見えないなら触れるようにしてあげるのがいい」という態度でのぞんだらどうでしょう。その善意はすれ違ってしま⁽³⁾うのではないでしょうか。

(出典) 伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社新書, 2015年)83-93頁。

(注1) イタコ 東北地方で、霊の口寄せ(生者や死者の霊や神霊を呼び寄せ、その意思を言葉で語ること)をする巫女。多くは盲目の女性。

(注2) 座頭市 室町時代には、盲人の琵琶法師の官名。江戸時代には、僧体の盲人で、琵琶・三味線などを弾いたり、また、あんま、はりなどを生業としたものの総称。「市」は人の名前。

(注3) モットー 行動の目標や指針とする標語、格言

(注4) ディスコミュニケーション 社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合えないこと。

[設問]

問1 下線部(1)について、「見えない人のイメージを固定してしまう」とはどのようなことか。本文で述べられているところを100字以内で説明せよ。(配点20%)

問2 下線部(3)について、「その善意はすれ違ってしま⁽³⁾う」のはなぜか。本文で述べられているところを150字以内で説明せよ。(配点20%)

問3 下線部(2)について、「それではますますディスコミュニケーションが深まってしまいます」と述べられているが、ディスコミュニケーションが深まる原因について本文で述べられていることを踏まえたうえで、その解消法について自身の考えを600字以内で述べなさい。(配点60%)